

詩

集

海の歌

石 中 象 治

詩集

海の歌

石中象治

黒田先生

石中象治

これらの貧しきすさびをば
 便りに代へて
 わが親しき人々に捧ぐ

海の歌 目次

海	の	歌	I		五
海	の	歌	II		八
五	月	に		三	
日	記	前		三	
午	の	思	ひ		五
海	の	思	ひ		五
黙	せる	海	よ		七
波	の	音		九	
牧	歌			三十一	
苦	難	の	日		三六
寒	驛			三六	
變	態			三六	
秋	思			三六	
A	坂			三六	
別	離			四十二	
ひ	ま			四十五	
追	記			四十七	

海 の 歌

I

光にあふれ

青々と

はてしれず深い

南方の大洋の中

屹立する岩礁、何百尺かの上に

白く、うすたか堆く積るグアナ

斷崖に如何さうしてかけたのであらう

綱をかけ それに身をまかせ

海鳥の糞を獲る命知らずのあの男たち

何處から彼等が來たか

附近の漁夫たちも知らぬ

鳥以外には何も登ることの出來ぬ

この大洋の岩礁の上に

彼等の喫ふ烟草のうまさ

空の美しさ、

そしてはてしない

東支那海の廣さ、

彼等をこりまいて

海鳥らは

亂れ飛んで 下りぬ、

あゝ あのかすれ鳴き――

海といふよりも

この海岸は、荒涼として心細い

その斷崖に碎けちる波も

浮ぶ海鳥も

誰一人これを見、形容するものはない

彼方に打ちあげられた

赤錆びた破船の肋骨や

脊椎の破片は

かつて大洋を疾駆した

颯爽たる新型船であり

多くの美しい客や

貴重な貨物をのせて異國の港を出たに違ひない、

東南風のはげしく狂ふ

この地帯の、

南方的な氣まぐれの 犠牲の

これは一つとなつたのであらう。

しかし

小徑といふよりも

隙間であるこの斷崖のふちを

行けば

何と これまで自分の思つたこと爲たことが

埃の如くに吹きちるか。

自分はたゞ

この岩角につかまる手、

踏みすぎる二本の足先に過ぎぬではないか。

五 月

五月

青葉、青葉

走る小學生よ

私も理屈を忘れたい。

日記に

いく分か

生活が充實してくる

天氣がつよく

屋根に雀達がきてとまる

手紙が来る

友達が来る

白い自畫像が出来あがる。

午前

言葉の通り

カスタニアの花は白い蠟燭をさぼし

春の風が吹いて

街は申し分のない午前、

お前は當惑し

困憊して

心くらくこの路に行く

カスタニアの咲いた美しい街路を。

お前は不幸すらも感じない

お前は唯ホツとしたいと思つてゐる。

海の思ひ出

海面にはそよ風がわたつてゐた、かういふ日の、ゆるやかに膨れた水平線を眺めると、私はこゝろ足りて、言ふことを知らなかつた。海は私の母、私のひそかなる戀人——こさういふ様な氣がするのも、私が島國に生れ、意識した最初の日頃から海に接してゐたせいであらうか。

あの水平線の、それこそなだらかな丘の向ふから、一艘の帆が孤獨に、こちらへ向いて來ると、私は何となしに手をひろげて待ちうけてゐたい氣になるのであつた。あの中にはこの陸を見つめてゐる眼があるに違ひない、とすれば私は何か石ころでも投げ上げて、彼にこの氣持を通じたい。

私は海が、殊に空想の中の海が好きだといふことを。

もしかすればあの船は別な方向の港を目ざしてゐるのかもしれない、そこに船人は、彼を歓迎してくれるひとを持つてゐるのであらうか。それなら私の折角の合圖は決して彼の心には映りはしない。やつぱり私はこゝに、もとの自分に返されるのだ、みすばらしい自分に。

黙せる海よ

黙せる海よ—

お前は知つてゐるか

破裂を知らずに朽ち果てたダイナマイトを
潰れてしまつた情熱を

いゝや

お前は知つてゐる

白^{しら}白^{しろ}しく

お前は永劫を秘めるのだ

うつろな世にきはまりもなく

咆哮し

咆哮し

お前は

一切の表情を埋めた

お前は永劫を秘める。

波の音

沖は暗く、荒涼としてゐた。私は磯傳ひに、波のしぶきにも構はず濡れて歩いた。足場のわるい波打際を、土地の人々であらう二三の、漁りあるく人に行き會つた。暴風に弱つて、打ち上げられた小さな魚を拾ふ彼等を、自分とともにひびく寂しくあはれに感じた。元氣を失つて遠く海邊に來た私であつたので。

海の上は吹きまくられた波しぶきの霧でボーツとかすんでゐた、私はみぢめに打ち寄せられた海鳥の、骸に手を觸れてみるのであつた。一週間から大荒れに荒れたといふ海上の、激浪にもまれ抜いた揚句に、力盡きて、ここに斯うしてみぢめな姿をさらしてゐるのであらう。豫測しがたい、この荒涼たる海をふるさとし、そこを生活の場所としなければなら

らない生物の運命、私は何かはかなさとも孤獨ともつかぬ感情にとらはれた。

自分は、かうして陸地にあるが、幸福なのであらうか――

沖の方は依然として暗くかすんで、波頭^{なみしら}は白々^{しろしろ}としてゐた。私は立ちごまり、誰憚らずこの感傷に身を浸しながら眼鏡の曇りを拭き、波しぶきにぬれた外套をかき合せた。

――波の音は今も尙ほ私の耳の奥に鳴つてゐる。

海が見える

――牧歌――

舊曆の三月十八日

観音様のお祭で

村の人たちは山に登る

この山原に

翁草^{アサモネ}の花はほゝけて

春風に白髪をなぶらせ――

若者は

小石を投げ

彼方で戯れてゐる乙女に

戀の思ひを報らせるが

乙女は知つてか知らぬのか

見向きも微笑みも返さない。

原一めんにかげろふが立ち

それを眺めながら

草の芽をむしつてゐると

ついうとうと眠氣がさし

若者はまどろみ

乙女の夢をみる

美しく、やさしい

それは遙かなる

海の彼方に住んでゐる

まだ一度も會つたことのない

しかし何だかどこかで

見たやうな顔だ。

微風が吹き

顔に羽蟲が來てとまり

くさめしながら目がさめる

うつこりし、やがて

若者はほくそ笑む

彼は決心がついたのだ

——よしさうだ！

彼方では人々のごよめき

子供たちの歡聲

若い男女の聲

聲——

そしてあひ間に小鳥の囀り。

彼は伸び上る

眺める

山の彼方の水平線を

その向ふには

煙る廣い廣い陸地

眺めてゐれば

遠方は

春がすみに

あるかなきかに

ボーツとなつて

たなびく雲なのか

海か 陸地か區別がつかぬ。

苦難の日

上等兵にならむと

思ひける年ゆかぬ日の

わが素朴なるねがひ

或^{ある}はまた

兵隊になり

祖國^{みくに}のために奉仕^{つぐ}せといひし

今は亡き

父の言葉をうとみける

あはれわが

若氣の日よ

號外の鈴のひびきや

ラヂオ報知に耳そばだて

心そらなるわがつまに

星一つなき卒^そなれど

われもまたいつの日

出征^{いっしゅう}かむか知らえじ

然^さらばいゆかむと

ふと洩しける

さりげなき一言ひとことにも

女ごゝろのかなしさや
面おもてかすみてつまの眼は
問ひよるごとし

あはれ

女ごゝろはかゝるらむ

まなこそらさず

しかすがに

氣やすめも今はえ言はじ
はるかにどよめく

人々の聲を聞きつ

然るべき道理ことばりの

男子おとこの言葉をば

探すなり

あはれはや

われも壯年となりしか。

寒 驛

汽車は高原で日がくれた

誰一人乗り降りの客もない

さびしい國境の寒驛で

電鈴の音だけがうつろに痾高い。

ガランとした客車の中で

生^なま欠伸をしながら横になり

窓枠を踏まへて寝ずまゐを直ほしてゐる

このやりきれない相客^{あひきやく}。

やつと動き出した車の窓から

見るともなく外を見ると

はるか山麓の民家に見えかくれする灯

あの灯の下に今時分

團欒してゐる人たちもあらう。

1、幼蟲の歌へる

ホカホカと暖かな早春の陽光が
愛ゆたかに私の生を育くんた
まだそこばくの餘寒はあれど
私の皮膚はもうそれに耐へる

お前は美しい蝶になるのだと

誰かの遠い微かな囁やき聲も

今の私にはそれこそ馬の耳に念佛だ
私はただ喰はねばならぬ

嫩芽わかれめが出ればその嫩芽を

蕾が出ればその蕾を

生あるかぎり

喰つて喰つて……それが私の運命だ。

2、蛹の歌へる

頭はへんに牙えかへり

そのくせ身體は痺れ硬ばつて
いひやうないこの倦怠
時満ちて私は涅槃に入る

この永遠の今！

3、蝶の歌へる

觸角にそよぐほろ濫い微風

ふかぶかど重なる萌黄色

碧い空、花々

眼の前の世界の申し分なさ

悠遠の波動の中

翅はわがはるかな思ひを運べども

わが身内にみなぎる

かそかな愁ひ——汚辱感

さもあらばあれ

今日の日は私のためには

不回歸の祝祭

私はこの花々の蜜を存分吸はう。

秋

思

(友に)

脚いたしといひて歩かぬ
子を負ひて

黄色なす河床に落つる

夕陽の色彩に染みつ

歸らなむいざ

氣疎けれども吾が家へ

今更に

はるばると離り來し

首都や友をば偲ばんも

術なしや

ゆゑもなく崩るゝ砂に

よろめきつ

ふと浮び來る苦笑ひも

秋の感傷といふべしや。

A

坂

そののだんだら坂の路には
春は桜花が爛漫と咲いた
咲いたかと思ふと散つてゐた

或る早春の雪の朝は

その下を武装した兵士が護つてゐたつけ
第一装の兵隊さんたちが

休みの日なご通つてゐるのは
何となごやかな風景だつたが

古典趣味の橋がかゝつて
その下にはお濠の水が青かつた
橋の擬寶珠が盗まれかけた
それを見張るためかのやうに
橋のたもとに交番があつた

いつか迷ひこんだ一番つがひの家鴨を
親切に飼つてゐたのは

やはりあそこの交番の巡査さんだつた

あそこの坂を下りた空地には

せまいながら芝生があり

或る時は色とりどりのカンナが

或る時はサルビアが

(それは秋でもあつたらうか)

或る時には名も知らぬ観葉植物が

半日にして植ゑ替えられて

朝夕の電車乗客たちの眼をみはらせた

併しあの花壇のまはりの

緑葉環だけはめつたに變らなかつた

時には いらだしい思ひで乗替へを待つた

あの車馬の交叉する何でもない坂が

思ひ出になると何と多彩に見えるのだらう

遠くはなれて來てしまつた自分――

別

離

遠くはなれて行つてしまへば

未知の土地で

お前は愈々停滯するであらうし

未熟にお前は残るであらう――

友の本意が讀めぬではなかつたが

ためらひつゝ私の心は決まつてゐた

久しく抑へられてゐた放浪性が
時を得てまた目をさましたのか

私は來た遠く友をはなれて

そしてふと心しほるゝ時

私は空を見上げる

(空こそはどこにでもある！)

よくも澄んだ空の色

あの美しい青さを幾年ぶり

私はたのしむことだらう

故郷^{ふるさと}にても歸つたやうに……

秋もたけ

かにかくに私の生活はこゝに來た
私はそれを信賴し肯定せねばならぬ
運命のことは神だけが知るのだ

ひ　　ぐ　　ま

めつきり寒くなつた――

田舎市^{さち}の公園の片隅

その檻^{ひぐま}の中に一匹の熊が
ぬれた混凝土^{たいき}にどつかり坐つてゐる

僕は北國生れ、柔和なやうでも猛獸
氣をつけなさいと貼板に書いてある
熊はもつと何か云ひたげだ

牙を切られた口を開けて見せる

人のゐない夕方

私は檻の前に佇んで

この若い罎に話しかける

罎よ君は出征したくはないか

めつきり寒くなつた――

北國のやうな風が吹く

檻の中がたそがれる

罎よそれではお休みなさい

追記

この集にまとめたのは、古くは大正十四年頃以後の二三篇、多くは昭和十年頃から「アカイエル」、「日本浪漫派」に出したもの、最近「四季」に出したものなどである。一つの試みのつもりで假版に附したのであるが、詩について浅い経験しかもたぬ自分には、全くのところ確たる見當などついてゐる筈はない。無論私も捉へがたい高い詩の精神を求めてゐるけれども、今はこれらの詩がせめて多少の純粹な、自然さだけでもそなへてゐるならば以て満足せねばならぬ。

この道は危険な道で誰でも行くべき道ではないと先人は教へ、私もさう思ふ。けれども既に途中まで來てしまつてゐる私は、後へ戻るよりも先へ行つた方がましだといふやうに考へる。危険は覺悟でやれるだけやつてみよう。

昭和十四年一月

徳島にて 著 者

昭和十四年一月二十日印刷
昭和十四年一月二十五日發行

(非賣品)

德島市前川町 樂安莊

發行者

石中象治

德島市富田浦町字西富田一〇三七番地

印刷人

高瀬浅吉

海の歌 限定發售部

昭和十四年一月二十日印刷
昭和十四年一月二十五日發行

(非賣品)

德島市前川町 鑒安莊

著者
發行者

石 中 象 治

德島市富田浦町字西富田一〇三七番地

印刷人

高 瀬 淺 吉

海 の 歌 限定壹百部